

国連「E S Dの10年」後の環境教育  
推進方策懇談会  
第2回会合

平成26年3月6日（木）

環境省総合環境政策局環境経済課

国連「E S Dの10年」後の環境教育推進方策懇談会 第2回会合

1. 開催日時 平成26年3月6日(木) 15:00~16:58

2. 開催場所 三番町共用会議所 大会議室

3. 出席者

北川 知 克 座長

阿部 治 委員(欠席)

小川 雅 由 委員

川嶋 直 委員

小澤 紀美子 委員

さかなクン 委員

実平 喜好 委員

関 正 雄 委員

棚橋 乾 委員

環境省

総合環境政策局長

大臣官房審議官(総合環境政策局担当)

総合環境政策局総務課長

総合環境政策局環境教育推進室長(含民間活動支援室)

自然環境局自然ふれあい推進室長

関係自治体

愛知県環境部E S D会議推進監

愛知県環境部環境活動推進課長

岡山市E S D世界会議推進局審議監

オブザーバー

文部科学省

国際連合大学サステナビリティ高等研究所

#### 4. 議 事

##### 1 開会

##### 2 議題

###### 1. 議論の前提と個別課題の検討

- ・ 前回の懇談会の概要
- ・ グローバルアクションプログラムについて
- ・ ESDとは何かをどのように伝えたら良いか
- ・ 本懇談会において重点的に議論する事項について
- ・ ESDに関する広報について

###### 2. 関係自治体からのヒアリング

###### 3. その他

##### 3 閉会

#### 5. 配付資料

資料1 国連「ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会

第2回会合 出席者一覧

資料2 国連「ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会第1回会合における各委員

の発言の概要

資料3 持続可能な開発のための教育（ESD）とは何かをどのように伝えたら良いか

資料4 本懇談会において重点的に議論する事項

資料5 ESDに関する広報について 環境省

資料6 持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラムについて

資料7 ESDに関する広報について 文部科学省

資料8 今後のスケジュール（案）

午後3時00分 開会

○吉田環境教育推進室長 定刻になりました。先生方がお集まりでございます。第2回の国連「ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会を開催したいと思います。

それでは、本日の出席者のご紹介をさせていただきます。

まず、座長でございます北川環境副大臣でございます。

○北川座長 どうも今日のご苦労さまです。

○吉田環境教育推進室長 小川委員です。

○小川委員 前は欠席して、申し訳ございませんでした。よろしくお願いします。

○吉田環境教育推進室長 川嶋委員です。

○川嶋委員 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 小澤委員です。

○小澤委員 小澤と申します。私も前は欠席しました。どうぞよろしくお願いいたします。

○吉田環境教育推進室長 さかなクン委員です。

○さかなクン委員 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 実平委員です。

○実平委員 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 関委員です。

○関委員 関です。よろしくお願いします。

○吉田環境教育推進室長 棚橋委員です。

○棚橋委員 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 なお、阿部委員は本日ご欠席という連絡をいただいております。

続きまして、環境省事務方の出席者をご紹介します。

清水総合環境政策局長でございます。

○清水総合環境政策局長 清水です。よろしくお願いします。

○吉田環境教育推進室長 鎌形審議官でございます。

○鎌形大臣官房審議官 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 上田総合環境政策局総務課長でございます。

○上田総合環境政策局総務課長 よろしく申し上げます。

○吉田環境教育推進室長 中尾自然環境局自然ふれあい推進室長はちょっと遅れて参ります。

私は環境教育推進室長の吉田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

このほか、オブザーバーとして文部科学省、国連大学、また、本日は、本年11月のESDに関するユネスコ世界会議が開催されます愛知県及び岡山市からも出席いただいております。

本日の会議でございますが、各委員におかれましては、発言をされる際には前の緑色のボタンを押していただくとマイクが入るようになっておりますので、そういうことでご発言をいただきたいと思っております。

続きまして、資料の確認でございます。配付資料の確認をさせていただきます。

第2回会合の議事次第の下に配付資料一覧というものがございます。資料1として、第2回会合の出席者一覧。それから、資料2として、前回（第1回）会合における各委員の発言の概要。資料3として、持続可能な開発のための教育（ESD）とは何かをどのように伝えたら良いかという資料がございます。資料4として、本懇談会において重点的に議論する事項。それから、資料5として、環境省のESDに関する広報について。それから、資料6として、グローバル・アクション・プログラムについて。資料7として、文部科学省のESDに関する広報について。資料8として、今後のスケジュール（案）ということでお配りしております。また、委員の方々には、参考資料として、前回の会議の議事録を配付させていただいております。また、議事録につきまして、傍聴に来られている方につきましては、後ほど環境省のホームページにアップいたしますので、そちらでご覧いただきたいと思っております。

それでは、ここからの進行は座長でございます北川副大臣にお願いしたいと思っております。よろしく願いいたします。

○北川座長 座ったままで失礼いたします。各委員の先生方には、前回に引き続き、お忙しい中足をお運びいただき、ありがとうございます。また、小川・小澤両委員につきましても、前回は欠席でしたが、今回は出席いただきまして、ありがとうございます。

前回、各先生方から、初回でありましたので、そのキックオフに関してさまざまなご意見を頂戴いたしました。その後、私のほうもESDに関する行事が東北と東京でありましたので、2月8日の東北におけるESDプログラムチャレンジプロジェクト、この会に出席をさせていただいて、復興支援も含めた中での幼稚園から小学生、中学、高等学校、そして、NGOの方々の取組の発表を見させていただいて、非常に心強いなという思いをすると同時に、ああいう大きな災害の中で、人のつながり、地域のつながりの大切さということ、皆さん、また、子どもたちにも発表をしていただきました。ちょうど仙台が8日は大雪になりまして、めったに仙台にも雪が降らない中での大変な日になったわけではありますが、自然のそういう現象を受けて、逆に、こういう気候変動の中での新たな出来事かなということを感じたわけでもあります。

また、2月22日には、丸ノ内で、企業やNGOが取り組んでいるESDに関する関わり、こういうものを子どもたちが発表するというイベントに出させていただきます、さかなクン委員にもご出席をしていただいたわけでありましたが、子どもたちの発表を私は一つだけお聞きして、地元の行事で失礼をしたのでありますが、なかなか有意義な発表をしていただいたようであります。

また、2月10日に、大阪に近い滋賀県の草津において、二つの小学校を視察させていただきました。子どもたちが地域の方々の協力をいただいて、それこそ素直な目で、色に染まらないといいますか、率直な考えの中で、いろんな環境に関する関わり、研究をしている姿を見させていただきました。また、一つの小学校では、その地域の歴史、そういうものを一つの屏風にすると。一人ひとりの生徒が自分たちの顔がわかるように、その屏風の中に絵を描いていくと。こういう作業の中での共同をされている姿を見させていただいて、やっぱり、学校現場における教育の大切さ、自らが学んでいく、そういう姿勢等を見させていただいて、ESDというテーマの中での教育の広がりを見させていただいたわけでありまして、改めて、この秋に向けて、こういう視察や、そして、イベントを通じて、より一層ESDという言葉を発信していければと思っておりますので、今日も各委員の皆様方には本当に忌憚のないご意見をいただいて、より充実した会議になればと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは、前回の懇談会において各委員の先生方からご意見を賜りました議論の概要について、環境省の事務方より説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

○吉田環境教育推進室長 環境省環境教育推進室長の吉田でございます。

前回（第1回）の懇談会でございますが、その際にご発言いただいた内容をまとめた概要をお配りさせていただいております。

第1回の中で、これまでの取組の評価ということで、ESDの良さ・意義についてということで、いろいろご発言をいただきました。阿部先生からは、ESDに関わる主体・活動・行動をつなぐ舞台装置としての役割があると。棚橋先生からは、教育そのものを転換する力があると。それから、ESDの目指す人材像ということでいろいろなご発言をいただいたところでございます。また、結果的にESDとなれば良いというようなお話もございました。

二つ目として、ESDの課題とその解決のための基本的な考え方ということで、まずは、誰に対する活動が必要なのか。それから、大人や教える者に対する対応ということが必要ではないかというようなお話がありました。また、ESDの質の向上ということでございますが、これ

は、人とか物、それから、手法といいますかシステムとか、プロセスとか、そういったものを整備していくことが必要だし、重要だというようなお話がありました。それから、大変だぞというような脅しの環境教育から、未来図が描けるような希望の環境教育になるような、そういうESDが必要ではないかと。それから、幼児期から高等教育までの持続的な実施が必要だと。それから、高等教育の中での教養教育、環境教育とかESDであれば、文理の融合というものが大切だというお話。それから、いろいろなステークホルダーの有機的な連携というものが必要だというお話もございました。

三つ目で、世界会議に向けた認知度向上策ということですが、各種メディアや有名人を活用していくということが大切ではないかと。それから、この会議を契機に、日本がこれまでにやっているESDの取組の世界への発信ということも積極的にやっていくべきではないかと。それから、現地の環境とも調和する日本の伝統的な漁法、そういったものを伝えていくということもあるのではないかと。

それから、四つ目といたしまして、ESDを進めるための持続可能な枠組み・仕組みづくりということですが、今のESDの取組というものはばらばらではないかと。そういったものをつなぐために、ネットワークのハブとなるプラットフォーム、そういった組織が必要ではないかと。それから、行政の取組としても、関係省庁、それから、教育委員会といったいろんな関係組織があるわけですが、こういったものを幅広く巻き込んだ枠組みづくりというものが大切ではないかと。それから、ESDの地球市民会議とかローカルな活動ということもあって、自治体のイニシアティブによる取組というものも重要ではないかと。また、経済界との協力体制の強化ということも考えられると。さらに、ESD実行計画、工程表といったようなものをちゃんとつくって、PDCAシステムをつくっていくということもあるのではないかと。ESDによって、「出来る化」、「成果を出す化」ということが必要ではないかと。あと、就職で不利とならないように、外部組織との連携というものも必要ではないかと。これは小澤先生のメモにもあった部分でございます。耕作放棄地における農業とか、他分野との柔軟な結びつきと実践が重要ではないかというようなお話がありました。

簡単にまとめたものでございますが、このようなご発言があったというふうに思っております。よろしく願いいたします。

○北川座長 ただいま、事務方のほうから、前回の各委員の皆様方の発言等についてのまとめの説明をさせていただきましたが、何かご質問、ご自身の発言の、ここが違うということはないでしょうか。

なければ、前回欠席でありました小川委員のほうから、もしご意見等があれば。

小川委員。

○小川委員 ありがとうございます。前回はうちの事務局次長の長手が参加させていただきまして、西宮で私たちがやっている事業内容については、ほぼご説明をさせていただいたかと思っております。

その中で、強調されたかどうかはわからないのですが、私が西宮市役所の中で働いていた当時、これは1990年代ですか。そこから環境教育というものに関わりまして、ESDの現在に至るまでの間で一番意識してきたのは、地域社会を動かしていくためのシステムづくりということがあります。前回ご紹介した、エコカードとかエコスタンプを使った、地域社会全体を動かしていくような仕組み、こういう仕組みが底流にあるとないかで、教育的な実践とか、あと、地域づくりとか、一つの価値を形成していくとか、さまざまなものが有機的に動いていくという点で、長年にわたって関わらせていただいた分野で、仕組みづくりをどういうふうにして地域のさまざまな主体が連携してやっていくのか、そういうところを改めてひとつ強調させていただけたらというふうに思っております。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

小澤先生、お名前を先ほど「オザワ」と申し上げて、申し訳ございませんでした。小澤委員のほうからも、ご意見等がありましたら、よろしく願いいたします。

小澤委員。

○小澤委員 前回、メモを出させていただきましたのは、日本学術会議の環境思想・環境教育分科会の座長をやっていたときの提言に基づいて出させていただいたのですが、この中の基本的な考え方は、今、学問分野があまりにも文理化されているために、文理融合という言葉が概略としてまとめられています。横断的な課題にどう取り組むかというところが一番大事なところではないかというふうに思っているんですね。今日、メモを見ましたら、さかなクン委員のほうで、伝統的な魚のとり方とかとありますね。そういうことも、高等教育のほうでも、実はそういった、私たちが伝統的に培ってきた、これは、欧米と違う、日本の自然と文化というのでしょうか、自然に関わる中で蓄積されてきたものをどう伝えるかという辺りが、今の日本の中では物すごく欠けてきているのではないかと思うんですね。ですから、そういうところを、文理融合とか、いわゆる地域で活動している人も大学まで来て、高等教育の中で教えるとか、そういったことも必要だということを提言しているのですが、そうい



ったところも考えていくといいのではないかというふうに思っています。

実は、昨日も岡崎の小学校の授業を見てきたのですが、子どもたちが6年生で、ただ単に物をつくって、それを売って理解してもらおうということではだめで、地域の方と一緒にやってやることによって、その地域の特産のむらさき麦で6年生の女の子がお菓子をつくって、それが今度は道の駅で売られるようになったとか、歴史も学び、自分たちの地域をどうつくるかということが発信できているんですね。そういった、いわゆる教科で系統的に学ぶことと違った横断的なところの両方が、学校現場、あるいは、大学教育でも、そして、地域の中でも、本当はそういうものが埋もれていると思うんですね。そこをどう見える化していくか、引き出していくかということが今は問われているのではないかと思います。

以上です。

○北川座長 ありがとうございます。

各委員の先生方に、また後ほど意見といたしますか、お話をいただきたいと思いますが、その前に、文科省のほうから今日は出席をいただいております、グローバル・アクション・プログラム、これにつきまして、今年11月の世界会議でグローバル・アクション・プログラムが発表されることになっております。その概要につきまして文科省のほうから説明をいただきますので、よろしく願いいたします。

○文部科学省 失礼いたします。文部科学省の靱井と申します。よろしく願いいたします。

お手元の資料6に基づいてご説明をさせていただきたいと思います。

今、座長からご紹介がありましたように、グローバル・アクション・プログラムというものを、ユネスコのほうで、「国連ESDの10年」の後継プログラムとして準備しております。そもそもの発端は、2012年にリオデジャネイロで行われた国連持続可能な開発会議、リオ+20と言われているものですけれども、その成果文書の中で、ESDを促進すること、それから、「国連ESDの10年」が終わってからも、持続可能な開発をより積極的に教育と結びつけて行くことが必要ということで合意したことを受けまして、グローバル・アクション・プログラムというものがつくられております。

グローバル・アクション・プログラムの考え方の前提といたしまして、ESDというのは、例えば、ユネスコだけが頑張って進めていくというよりは、むしろ、あらゆるレベルでいろいろな関係者がESDに関する行動を実施していくことが必要という考え方がございまして、それに基づきまして、五つの優先行動分野というものが設けられております。

お手元の資料の一番下の四角で囲ってあるものが五つの優先行動分野でございまして、こ

れらにつきましているような形でいろんなレベルで支援をしていきたいと思いますというのがグローバル・アクション・プログラムの中身でございます。

一番目の政策的支援というのは、例えば、日本においても、教育振興基本計画の中でESDの推進ということが明示的に書かれているわけですが、そういう形でいろんな政策文書の中にESDという考え方を入れ込んでいくことが重要であると。それに向けていろんな支援をしていきたいと思いますということが1点目でございます。

それから、2点目の包括的取組となっているところでございますけれども、こちらは、一人ひとりが行動していくことが必要なだけけれども、単に特定の個人だけが頑張っているだけではだめで、例えば、学校であれば、1人の先生だけが頑張っている状況ではなくて、より学校全体で、例えば、学校の建物にもESDの考え方が反映されるような形で、いろんなアプローチ、いろんな観点からのESDの取組というものを包括的にやっていく必要がありますねということが2点目でございます。

それから、3点目の教育者の育成というのは、書いてあるとおりなんですけれども、ESDを実際に実践していくにあたって、学校の先生だけではなくて、いろんな学習の場面があると思うんですが、ESDを実践していけるような方々の育成ということが重要ですよ。

それから、4点目の若者の参加の支援ですけれども、こちらについて、ESDというのは、将来にわたって持続的な地球環境を維持していきましょうということでございますので、これから先の長い若者が議論の中心になっていくべきだろうと。そういう若者たちがESDに参加したり実践をしたりしていくことを支援していきましょうということが四つ目でございます。

それから、最後の地域コミュニティの参加の促進というのは、先ほど小澤先生からもお話がございましたけれども、いろんな課題について学んだり、いろんな身近なところから行動を起こしていくということの必要性を学んだ後に、実践の場として地域コミュニティの役割というのは非常に重要であると。そういう地域コミュニティを巻き込んだ形でのESDの推進というものが必要であるというのが5点目でございます。

グローバル・アクション・プログラムの中身というのは、実は、優先行動分野を説明しているというところでございまして、具体的に誰が何をするかということは書いていないんですね。そこが、冒頭に申し上げた、あらゆるレベルでいろんな関係者が行動していくことが必要だということの考え方でもあるのですけれども、具体的に誰が何をしていくかという議論は、11月の世界会議の場で、もう少し具体的な行動についての話をしていきたいと思いますということになっております。

グローバル・アクション・プログラムの現状を申し上げますと、昨年11月の第37回ユネスコ総会、これはパリの本部の最高意思決定機関でございますけれども、そこでは既に承認をされております。今年秋の国連総会でも採択される予定になっております。そうすると、実際に世界会議で何をやるかということでございますけれども、これ自体は、こういうものができましたということで、ユネスコはローンチという言葉を使っていますが、対外的に大きく発表するとともに、いろんなステークホルダーの方々にも、実際に、自分たちのそれぞれの立場からどういう形でESDに取り組んでいくかというコミットメントについて議論をしていただくという予定になっております。

以上でございます。

○北川座長 ありがとうございます。

ただいま文部科学省のほうからご説明をいただいたグローバル・アクション・プログラムであります、各委員の皆さん方からご質問等はございますでしょうか。

(なし)

○北川座長 なければ、次に進みたいと思います。

それでは、ここまでは本日の議論の前提となる報告事項でありまして、ここからは、幾つかの議題について、皆様にご議論をいただければと思います。

まず、ESDの取組をさまざまな主体に行っていただくにあたり、そもそもESDとは何かと。私も、地元やいろんなところで環境教育というか、この秋に国際世界大会があるので、広めていきたいという話をする、先生、ESDとは何ですかとよく聞かれるのですが、多様性というか、いろんな価値観、そして、国や我々の家庭においても、その家庭の歴史や文化があると思うのですが、そういうさまざまな価値観の中で、それを相互理解できて、そして、相手の立場に立ちながら、自らも切磋琢磨して、相手を尊重していける、こういう人間というか、こういう人を育てていくことだという話をするわけなんですけれども、いずれにいたしましても、ESDとは何か。それをどのように伝えていったら良いかについて、人によってさまざまな説明の仕方があると思います。前回も各委員の皆さん方から一部そういう意見をいただきましたが、いま一度この場で整理・検討をしていきたいと思いますので、環境省より若干説明をさせていただいて、意見の交換を図りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○吉田環境教育推進室長 それでは、資料3をご覧くださいませか。持続可能な開発のための教育（ESD）とは何かをどのように伝えたら良いかということで、まず、1として、これまでの説明の例ということで、いろいろなところで使われている定義等について整理してみまし

た。

一番最初に、ユネスコのホームページに書かれている説明を示させていただいております。全ての人々が持続可能な未来の実現に必要な知識、技能、生活態度、価値観を身につけることができる教育・学習を意味します。また、ESDでは、持続可能な開発を実現するにあたって、人類が直面する主要な問題を授業や学習に取り込んでいます。

(2) として、これは、ESDの10年で、国としてESDの実施計画をつくっておりますが、その中の定義でございます。「一人ひとり世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動を変革するための教育」をいうということが書かれております。

めくっていただきまして、裏でございます。(3) としまして、国立教育政策研究所が出されている学校におけるESDに関する研究報告の記述です。その中にESDの視点に立った学習指導の目標というものがございます。ここで、教科等の学習活動を進める中で、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うということが書かれております。

また、(4) として、(1)から(3)以外の説明例として、上の二つは、自治体等で説明に使われているものを引用させていただいております。また、三つ目の丸は、国が主催した会議の中で発言した内容を起こしたものでございますが、何か環境のためにちょっとした行動を起こすだけでも、それはESDの始まりですといったようなことを発言した記録が残っております。

2番目として、ESDとは何かということでございます。1. の説明例を踏まえまして、ESDのポイントを整理した上で、ESDとは何かということを知りやすく伝えるために、その中から、ESDの良さとは何か。それから、環境教育や学習の現場で、ESDについてどのように取り組んだら良いのかということ抽出して説明するということはできないだろうかという問題意識の中で、まず、(1) として、ESDが備えているポイント・キーワードということで、これは、前回に指摘していただいたものについては下線をしておりますが、さまざまなステイクホルダーが関わっていることとか、それから、家庭等のあらゆる場において実施されること。それから、つながりを大切にしていくこと。それは人であり、分野であり、時間、地域というものもあるかもしれません。それから、長期的視野を持っていることということで、先々のことも考えて最適な解を得るのだと。それから、「脅しの環境教育」ではなく、未来の夢が描けると。それから、課題を解決するために必要な能力や態度を身につけると。それ

から、気づきを行動につなげるということ、Think globally, act locally ということを書かせていただいています。

(2) として、ESDの良さとは何かということで、これは、こういうことが考えられるのではないかと、案を示させていただいております。一つ目は、持続可能な社会づくりに向けて行動を起こすことの意義について、単なる知識としてではなく、深い理解が得られ、自らの価値観の変容等とともに、自然に行動が伴うようになります。それから、二つ目は、直面するさまざまな持続可能な社会づくりに関する課題の解決に向けた実行力を身につけることができる。三つ目ですが、実行力を身につけた者の活動の結果はもとより、ESDの過程でさまざまな者が対話を行うことにより、実際に、地域や地球のさまざまな課題の解決につながっていくということがESDの良さとは何かという問いでございます。

(3) として、ESDにどのように取り組んでいけば良いのかということでございますが、これも案として示させていただいております。まず、環境に関する知識の習得や環境保全活動の実施というものもESDの取組の第一歩であるが、さらに、良さを発揮していくためには、以下の要素を教育、学習等の中にできる限り盛り込んでいくということが重要であると。一つ目は、個々の課題の解決のためには、有限な環境のもと、相互のつながりや多様性を認識しつつ、環境の恵みや地域や世代にわたり公平に享受できるように、将来のビジョンをもって、連携・協力して課題に対し取り組む必要がある。二つ目としてこれらの課題を地球的視野で考えつつも、自らの問題として捉え、身近なところから取り組んで、持続可能な社会づくりの担い手となるような人材の育成につながるということが重要ではないかと示させていただいております。

説明は以上です。

○北川座長 以上、環境省のほうから説明をさせていただきました。

この点について、各委員の先生方、ご意見等を賜ればと思うのですが。

実平委員。

○実平委員 意見の前に一つ。前回にお配りできなかったeco検定の冊子を配っていただいていますので、ご参照ください。こういったマテリアルもESDの中で有効に使っていただければというふうに思っています。私がなぜこんなことを言っているかというと、eco検定の委員をやっているからということだけです。別にお金をもらっているわけではございません。

前回申し上げましたけれども、ESDなるものは、私は今回初めて知ったということなんですね。そういった意味で、ちょっと変わった人間を呼んだなと思っていらっしゃるとは思いま

すけども、ESDと環境教育との差分とは何かということをちょっと教えておいていただければありがたいかなと思います。よろしくお願ひします。まず質問です。

○北川座長 この件について、上田さん、大丈夫ですか。

○上田総合環境政策局総務課長 その点は、まさに今回の資料で皆さんに確認したかった点でございます。というのは、後で議題に出てきますが、広報・普及啓発で、ESDの最終年ですから、盛り上げていこうと。皆さん、やりましょうというときに、逆に、現場で環境教育とか環境保全活動をやっている人に、具体的にプラスアルファ何をすればいいんですかと言われてたときに、定義とかはあるので、それをお示ししても、それを現場でやっている人に伝わりにくいと。プラスアルファ何をやったらいいのだろうかというのは、今回吉田室長が説明された資料3の(3)、具体的に何に取り組んだらいいんですかということ、一つ目の丸のところ、以下の要素を今やっている教育、学習の中に取り込む。プラスアルファをすればESDになるんですよと、こういうふうな言い方をすることができるでしょうか。それがいいのかどうか。また、そのときに、こういう要素という二つ挙げたものもいいのかどうか。これを皆さんに、今回まさに議論していただければと思ったところです。そのような差分の言い方がそもそも間違っていて、こういう言い方をしたほうが現場はわかりやすいということだったら、これをやめて、違うやり方もあるのかなということ、まさに我々も同じ問題意識で、こちらのほうも資料をつくらせていただきました。補足させていただきます。

○北川座長 実平委員、よろしゅうございますか。

○実平委員 私はわかりました。

○北川座長 委員の先生方でも、環境教育とESDの違いというか、そのところで、もしご意見等があれば。

川嶋委員。

○川嶋委員 そもそも、環境教育とは何かということさえ非常に幅が広くて、こっちからこっちまであるわけで、僕自身、ESDという言葉は初めて聞いたのは2000年の頭ぐらいだったか、アメリカのある環境教育団体の方がキープ協会を訪問されて、これからは環境教育ではなくてESDだということを熱弁されるのですけども、話を聞けば聞くほど、「僕らはESDというのを環境教育という名前でやっているだけだ」ということが僕の正直な印象だったんです。ですから、今ここに資料として用意されたご指摘の(3)のESDをどのように取り組んでいけばいいのかというところを読んでも、これは「僕らは環境教育ということでこのようにやっているんですけど」という感想です。ただ、全体の記号としてESDというものが出てきているとい

うことで、環境教育にかわってESDですからということではもちろんないと僕は理解していますし、環境教育自体をみんなが勝手に理解して勝手にやっているわけですから、それは当然、持続可能な社会の実現を目指して環境教育をやっているわけですから、何らESDと差があるものではないという理解の仕方があるかなと思います。

○小澤委員 今、川嶋委員がおっしゃった、ちょうど2000年のころ、IUCN、いわゆる世界自然遺産の調査団体であるところがディベートをやっているんですね。そのときに、環境教育とESDの違いはということの結論がないのです。大きく四つのパターンに分けて捉えていましたけれども、そういった意味で、私は、今回のこの場は、環境というトピックを通して学び方を学ぶというのでしょうか、そういうところが必要かなと。それで、絶対正しい解があるわけではないので、対話とか談議を通してよりよい未来をつくっていく、そういう捉え方をしたらどうかというふうに思っている立場です。

○北川座長 ありがとうございます。

では、関委員のほうから。

○関委員 今の点で言うと、環境中心に物事を考えるということは全然私も賛成なんですけど、そもそも、持続可能な発展とか持続可能な開発とか持続可能性とか、その言葉自体が正しく伝わっていないとか、何となく長く続くという、単純にそういう意味で使われているのではないかと思うんですね。これは、皆さんご存じのとおり、ブルントラント委員会のきちんとした定義もありますし。でも、あの定義のとおりを考えている人というのはかなり少ないのではないかという気がするんですね。

一つ思うのは、将来世代との間の公平というだけではなくて、いろんな公平の概念がそこに含まれていて、現世代間の中のいわゆる経済的格差の問題、不公平とか、さまざまな問題を含んでいるんですね。そこをどういうふうに伝えるとか、そこがあまり伝わっていないということが一つの問題かなと思います。

それから、持続可能なといったときに、例えば、企業なんかは、持続的な成長という言葉があつて紛らわしいのですが、右肩上がりですつと成長していくというふうな意味で持続可能なという言葉をよく使っているんですね。要するに、持続可能性についても少しわかりやすく説明をしておく必要があるのではないかということが言いたかったことです。

○北川座長 ありがとうございます。持続可能性というのは、自分たちの世代だけで資源も含めて使い切ってしまう、自分さえよければいいということではなくて、未来までつなげていくとか、そういうところが持続可能性というところかなという思いがするのですけれ

ども。ESDの一部が、私は環境教育だと思っているんですが、ESDというのは非常に幅が広いとよく言われますし、来年から文科省も道德教育を実施されるようなんですが、究極の道德教育かなと思っているんですね。一人ひとりがこれから、温暖化というか、気候変動があるこういう状況、それから、世界各国で争い事がある中で、生きていく上においてどう生きていくかということを実践していくとか、自らが学んでいくという、そういうことから考えれば、究極の道德教育がこのESDかなという感じを、私個人の考えなんですけど、そういう感じを受けているものですから、来年はちょうど道德教育が始まるということで、ある意味、この秋にESDの国際大会があるということでもありますので、ぜひそういうような考えを持ってこれからの教育を見ていきたいなとは思っているんですけども。

委員の先生方、また何かこの点についてご意見があれば。

棚橋委員。

○棚橋委員 先ほど、現場のというお話もあったので、小中学校の現場の話をちょっとさせていただきますけども、かれこれ私自身が30年近く環境教育をやってきて、ESDが出てきて変わったなというふうに思ったところは、体験とか心情の育成というところから、いろんな課題を解決するための能力をどうするのかという、そういう見方も入ってきたというところがとても大きかったですね。環境教育で一番最初に世界的に認められていったというか、注目されたベオグラード憲章を見ていっても、ESDと同じように、最後には行動というアクションがあるわけなんですけども、ただ、アクションを起こすためにはそれなりの力が必要なわけですね。そういった社会に出ていくための力をつけるために学校というところがあるわけなんですけども、その中でも、持続可能な社会をつくっていくためには、特にこういう力が必要なんだという、そういう視点がESDには明確にある。どちらかというところ、環境教育には、環境についてのことを中心に学ぶと。環境で学ぶとか環境について学ぶとかという言葉がかつてありましたが、ですから、そういった違いが多少あるかなというふうに思うんですね。

その能力ということになったときに、例えば、資料3の2ページ目に、国立教育政策研究所のほうで、学校におけるESDに関する研究ということで資料がありますけども、ここも、能力・態度をどうするのかという、それがとても大きな問題として出てきているのです。

例えば、ドイツなんかでも、ドイツでは明確にESDコンピテンシーという言い方を使って、ESDによって育まれる力はどういうものかということをも明確に打ち出してやっているわけです。ですから、いろんな問題を解決していくためにはこういう力が必要なんだと。例えば、論理的に考えると、問題解決的に取り組むとか、協力をするとか、意欲を高く持って頑張



るとか。大ざっぱに言えばですけど、そういった力を子どもたちへの教育の中にどう生かしていくのかというところが、今までの比較的体験重視に見られていた環境教育とは、学校現場ではちょっと違ってきたかなと。ESDとしてやると、環境から離れても、子どもたちの主体的な学びというものは保障されるんですね。例えば、先日、清水局長に見に来ていただきましたけど、うちの学校の5年生が春から田んぼをつくって、稲作をして、それは当然、地域の農家の方に来ていただいて教えていただくのですが、つくったお米を使って、市内にいる外国の方に来ていただいて、いろんな国の料理をつくって、一緒に子どもたちがつくるんですけども、お米を通して異文化体験ですね。見方によっては食育になるわけですし、国際理解教育になるわけですね。それをしながら、子どもたちは、お米ということに取り巻くいろんなことを調べ学習するわけです。今年の子どもたちは、たまたまお米の消費が下がっているということに気がついて、じゃあ、お米をもっと食べてもらうようなビデオをつくって、ユーチューブにアップしようと、そういう行動に入っています。それは子どもの発想で始めて、そこは、環境教育というよりは、情報教育の世界になるわけですね。ESDというくくりの中で言えば、子どもが主体になって問題解決に取り組んでいくという流れの中にすっぽり入っているわけです、何のみじんの狂いもなく。環境教育ということだけで言ってしまうと、それはちょっと違うのではないですかというふうに言われるかもしれませんが、学校で今やっている子ども主体にどう学ばせるかということを考え、例えば、表現力をつけるとか、それから、相手のことを考えていろんな質問をしてみるとか、論理的に考えてしっかり訴えるとか、訴えるためにはきちんとした資料が必要ですから、それをしっかり調べたり、自分たちで足を使って取りに行ったりということ、小学生でもできる。そういうものを小・中・高で積み上げていくことが、しっかりとした能力・態度の育成なり、それが持続可能な社会づくりになっていくであろうという、そういう視点は、ほかの方は持っていらっしやっただかもしれませんが、私は、環境教育だけをやっていたときには、なかなかそういうところに気づくことができなかつたということがあります。

○北川座長 ありがとうございます。

今、棚橋先生におっしゃっていただきましたように、ESDというのはそれだけ幅が広い分野があると思いますし、子どもたちが主体的に取り組んで、なおかつ、こんな一言で済ましてしまうと叱られるかもわかりませんが、生きるすべを学ぶということだと思えるんですけども、いろんな事件とか、若い人の犯罪がある中で、小さいときからきちっと生きるすべ、自分がどういう立ち位置にいるかということを読んでいけば、そういう犯罪も起きないのでは

ないかと思うものですから、ある意味、環境だけではなく、広がりのあるESDというものは本当に必要だなということを感じておりますので、この点について、ほかの先生から。

小川委員。

○小川委員 環境教育という視点もあれなんですけど、私が現場で環境教育の担当をしているときに、学校の先生たちから相談があったころです。ちょうど1990年です。総合的な学習の時間の導入の段階で、先生たちから相談がよくあったのですが、先生たちの発想の中に、課題を横断的に組み込んでいくということはあるのですが、どうも根っことしての生きる力というところからのアプローチというものがなかなか出てこなかったんですね。今は、私たちの市でもそうですけど、小学校での総合的な学習の時間は、それなりに先生たちも随分と工夫されて展開できていますが、中学校になってくると、実践例ががたっと落ちていくというところもありますし、高校になってくると、ほとんど見えにくい状況がありますね。もし、仮にESDということを進めていこうとしたときに、学校現場で総合的な学習の時間が一体どういうふうに総括をされて、そこで、本来育もうとした力とESD目指すべき社会の方向性、こここのところのつながりとか関係性を整理してあげないと、先生たちは、総合とESDをどういうふうに切り分けたいか。そこに環境という切り口が入ってくると、あくまでもこれは課題としての認知だと思いますので、余計にそこはまた課題をつなぐというような構成で終わってしまわないかなという危惧は感じます。そういう点で、僕は、学校の先生たちの研修をするときには、ESDというのは、基本的につけたい力は先生たちが総合的な学習の時間でやられていることだと。それを、今の地球の抱えているいろんな課題、これを具体的に、目の前に来ていることを長続きさせるというよりは、むしろぼしゃっていくような構造になっている課題をどういうふうに見据えていくのか。そこに自分たちの生き方を考える力をつけていくという、その組み合わせといいますか、そこはすごく大事なポイントかなというふうにお話ししているんですね。

あと、もう一つ。僕が1988年、環境省から懇談会報告に出たときに驚いたことは、環境教育というのは社会・経済の構造変革なんだと。社会と経済の構造を変えていく、そこが環境教育の最も大きなポイントであるというふうなことまで書かれていたことを、すごく気にとめていまして、もう既に、その段階で、環境教育というのは単なる環境問題についての知識を学ぶものではなくて、一人ひとりの個人の行動変革と社会の変革までを視野に入れられたものであると、環境と経済と社会の統合と言われるような問題は既にそのときに提案されていたというふうに理解しております。それと、先ほど川嶋さんがおっしゃられたように、

ESDで言う持続可能な社会というところの設定は、ある意味、我々としては、環境教育の文書を読んだ者にとっては、そのままストレートにつながっていきます。そこに、総合的な学習の時間の生きる力という部分の接合、これをひとつ整理してあげないと、学校の先生がもしこのことについての整理ができないと、一般の方にはますますわかりづらい部分になってくると思いますので、一度その辺もご意見を聞かせていただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

○北川座長 ありがとうございます。

今、小川委員のほうからおっしゃっていただきましたように、指導者ですね。教育というのは指導者に尽きるというのは極端な言い方かもしれませんが、そういう側面がありますので、いずれにしても、ESD、環境教育、そして、指導者等のご意見をいただいたわけでありますが、この懇談会において今後重点的に議論する事項、この点について、環境省のほうから一応説明をさせていただいて、また委員の皆さん方のご意見をいただければと思いますので、よろしく願いいたします。

○吉田環境教育推進室長 今、いろいろご意見をいただきましたので、今からご説明する重点的に議論する事項にもかなり関連してくると思います。資料4につきましてご説明をさせていただきます。

1、本懇談会における議論の重点として、(1)として、子どもだけではなく、高等教育を学ぶ者、企業人、社会人等、あらゆる主体に対し、現在、さまざまな形で環境教育等の機会が提供され、実施もされていることに鑑みれば、既にESDの取組の第一歩を踏み出していく環境教育等の実施者が、より一層の効果の発揮を目指し、さらにどのような取組をしていくべきかの議論に重点を置くこととして良いか。

(2)として、具体的には、現行の環境教育等の実施者が、ESDの良さに気づき、ESDの取組方法を学び、実践していくための支援体制について議論していくこととして良いか。

2、具体的な検討事項といたしまして、(1)国民や環境教育の実施者等に、ESDの良さに気づいてもらうための広報・啓発ということで、この秋の世界会議をどのように活用していくのか。

それから、(2)として、学校の教師だけではなくて、環境教育の実施者等が、ESDを学び実施していくための支援体制ということで、実施者等に対する研修。用いることのできる資料、教材等の提供。さまざまな主体と連携してESD実施の場を広げ、内容の充実を図っていくための地方自治体や企業、農家等、連携先の確保。それから、四つ目として、実施者等が支

援を求めることができる人材、ネットワーク、それから、拠点の整備ということ。

それから、(3)といたしまして、ESDの取組を全国で幅広く展開し、継続していくための工夫ということで、当面の施策の目標、各主体が共有する目標等は必要か。計画的に施策を展開していくための工程表等のようなものは必要かということを示させていただいております。

先ほど、先生方にいろいろご意見をいただいておりますが、加えて、この資料4に対しますご意見をいただければと思います。よろしく願いいたします。

○北川座長 それでは、資料4につきまして、先生方のご意見があれば。

川嶋委員。

○川嶋委員 ごめんなさい。資料4に行く前に、資料4に関わるんですけど、資料3です。僕は、数日前にこれをメールでお送りいただいて、非常に興味深く読ませていただきました。

幾つかあるんですけど、まず、「ESDとは何かをどのように伝えるか」ということがESDのゴールなんだろうということの一つです。それはESDのスタートでしかないはずで、「ESDが何かをみんなが理解したら、それでオーケーなんですか」ということです。やっぱり、なぜESDが出てきたのかという背景とか、何を目標にしていくのかというESDの目標とか、それから、具体的な方法は何なんだろうということ議論すべきはないかと思います。「誰に何をどう働きかけてゆくか」ということの全体を理解されて、さらにそれが動いていくということが大事なことであって、その最初の手前のところで、「まずESDとはこういうことなんだよね」ということを理解されることが大事なのではないかということの資料整理なのだとは僕も理解しました。それが1点です。

もう一つは、この資料でのキーワードは「行動」です。何度も行動変容とか行動変革という言葉が出てきます。ですから、ただ知るだけではなくて、行動が変わらなきゃいけないんだよねということは言うまでもないことですが、行動というのは具体的に何をイメージしての行動なのかということなんです。さっきもちょっと出てきましたけど、日常の中でのちょっとした工夫とか心がけとか気遣いとか、「スイッチを切りましょう」とか、「分別しましょう」とか、いろいろありますよね。もちろんそれは行動のうちの一つですけど、それだけをやっているだけで、今僕たちが抱えているさまざまな課題は全部解決するのでしょうかという問題があります。それは、入り口としては別にいいかもしれないのですが、それさえやっていたらいいんですかということがあります。行動の先に社会のシステムが変わることまでいかなきゃいけないわけですね。行動という言葉は物すごく幅が広くて、あ

えて言えば、生活レベルとしての日常の日々の生活者としてやったほうがいい行動ということと、それから、もう一つは、社会の制度や技術などを使ってシステムを変えていくという行動。だから、つまり、政治家に求められる行動、それから、行政官に求められる行動、企業者に求められる行動がそれぞれあるんだと思うんですよね。個人の意識に頼るということだけにすると、非常にESDというものが力のないようなものと僕はイメージされてしまうのではないですね。だから、ESDはあくまでも、最初のベースを、とりあえず、みんな、この踏み台の上に乗っかろうよと。ここから先をどうするのかということ議論するための大人の常識みたいなところなのではないかなと思うのです。、だから、その辺りを整理した上でESDというものを位置づけないと、ちょっとした環境配慮をすればESDオーケー、もしくは、ESDとは何かに答えられたらそれでもオーケーみたいなことだと、ちょっと違うのではないかなと。

すみません、話を元に戻すようなことになってしまったかもしれませんが。

○北川座長 ありがとうございます。

まさしく、今おっしゃっていただいたように、その辺りの整理も含めて、一度また今日のご意見をいただいて、整理をさせていただく中で、次のステップの中でそういうお話もしていければなと思っております。

この点について、また、今、資料4の説明をさせていただきました。広報については、この後、別に説明があるようですので、それ以外の部分について、委員の皆様、いかがでございますか。

実平委員。

○実平委員 ESDというのは、基礎科目と応用科目あるいは専門科目というのがあると思うんですね。小学生のところというのは、基礎科目のところをきっちりやっていただくということが重要なんでしょうけども、教育というのはあくまでも手段でしょうから、何をやるか——川嶋さんと近いのかもしれませんが、——というようなところがより重要になると思います。それは、サステナブル・ディベロップメント、持続可能性な開発ということがありますが、国レベルであったり、自治体レベルであったり、会社であったり、コミュニティであったり、家庭であったりするわけなので、そこで何をやりたいのか。どういう姿でありたいのですかということグランドデザインというんですか、そこを決めた上で、それに向かって物事を進めることが重要です。それを考えること自体もESDに入るのかもしれませんが、そういった取組というものは必要で、大ざっぱに議論をしてもいいのですが、やはり、行き着くところは何かを実践して、失敗をして振り返ってやるということがないと、なかなか

か社会は変わらないのではないかという気がしています。

○北川座長 ありがとうございます。

小川委員。

○小川委員 東日本大震災の後に政府のほうで出された報告書の中で、すごく大きな教訓として出されたことがあります。それは何かというと、地震とかといった問題を考えるのは地震の専門家だけではだめだと。そこに歴史学者が入り、地質学者が入り、そして、地理学も含めた包括的な人たちの意見を聞かずに、また、そういう情報を統合せずに問題認識を持ってきたところに、予測できないことも含めて多々あったのではないかと。今後のあり方としては、多分野からどれだけの知識や知恵を集めて統合的な判断ができるかというようなことが書いてありました。僕は、まさにこれがESDにとって大きな切り口だと思っております。

もう一つ言うと、日本の社会というのはこれから急激な人口減少社会に入ります。2100年に4,500万人オーダーの社会を、今のままでは予測が出ているわけですけども、これを1億人にするために、移民受け入れを積極的に推進するのか。それとも、4,500万人に応じた社会像をどう考えていくのか。それをもう少し改善して、5,000万人、6,000万人という人口の社会にしていくのか。この課題というのは、今生まれた子どもたちの老後なんです。今、小学生の子どもたちは、自分たちが現役世代のうちに、このシナリオを全部形にしていかなければいけない。今、日本の社会というのは、その局面にもう入っているわけです。同時に、世界は、人口が、このままでいくと爆発していくと。こういう時代を生きていくということを、大人たちはもうちょっとはっきりと僕は認識すべきだと思いますし、それは、子どもたちも含めて考えていけるような方向づけが要るんですけど、今、大抵中心になっている大人というのは、右肩上がりでも人口も経済も伸びた中で価値観をつくってきた人たちばかりなので、これから、その全く逆に進んでいく社会の構造の中で、それを希望の方向性に持っていくために、一体何が要るのか。それも、ESDで本来これから考えていかなければいけない課題だと思うんですね。

先ほど、個々の家庭の話とか、それを職場でやるとか、国とかいろんな自治体とかというレベルで考えたとしても、国際的なレベルで判断しなければならない要素もありますし、それは多岐にわたりますから、そういう時間軸と、それから、水平軸の両方で、どれだけ我々が統合的に物を考える、その材料を寄せ集められるか。そういうことを判断する人たちがまず必要だと思うんですね。社会像を議論していくということがこれまで以上に重要になってきますので、そういうことを政府は、都道府県は、市町村は、子どもたちを抱える家庭はど

うするのかということぐらいまで、僕は、ESDを議論していくのであれば、課題の一つとして取り上げないと、すごく空回りしてしまうような気がします。

○北川座長 ありがとうございます。

政府のほうでも、確かに、50年後の社会ということで、その議論を官邸のほうでも始めているようでありまして、我々党のほうでも、100年後の日本を目指す中で、この人口がどこまで減るのかと。移民の受け入れに関してもどこまで可能なのかと。今、英語教師を増やすという話があるのですが、これから10年、20年先、英語の教師がどっと増えたときに、20年後になれば、iPadではないですけども、世界の言語が翻訳できるような機器ができていないのかと。そうなったときに、英語教師の皆さんはどうなるのかと。こんな話も実は党のほうでされているものですから、今、小川委員におっしゃっていただいた話の中で、それこそ50年、100年先の日本だけではなく、世界を見据えた中での教育とESDというものが関連もしてくるのではないかなという感じがしているのですけども、いずれにしても、そういうグローバル、また、長期的な話も、各委員の皆さんからもお聞かせいただいて、今後の一つの課題の中でこういうものを取り上げていければなと思っていますので、よろしく願いいたします。

この件につきまして、ほかに。

では、小澤委員のほうから。

○小澤委員 二、三人の今の議論を聞いていて、一つは、学校教育に限れば、あるいは、大学でもいいです。専門科目です。それは、今までは、どちらかというところ、1プラス1は2という教育をしてきたんですね。でも、ESDとなると、どういう未来か。例えば、人口的な視点から見ると、人口減少をそのまま認める社会なのか。あるいは、もう少し人口を増やしていくのか。あるいは、ハードだけをやっていけばいい社会なのか。そういったものはどうしたら求められるのかという、そういった議論が求められるのがESDだろうと思うんですね。そして、ESDをやるには探求型でやらないといけないという。それに絡んで、もう一つ、日本の子どもたちに非常に大きな問題は、去年のPISA型学力でも、マスコミの報道だと順位が上がっているだけなんですけれども、あれは相対的ですから、もともと変わらないと思うんですね、日本の子どもたちの教育においては。でも、文科省がやりました去年の学力テストで、環境的な学習、先ほど小川さんが言った総合的な学習の時間をやっていた子どもたちの成績はいいんですね。それは、OECDの調査でも、日本の子どもたちの意欲が世界でも非常に低いんですね。探求型でやっているお子さんたちは非常に意欲を持って、ますます自ら主体的に学ぶた

めに、ほかの教科まで点数がよくなっていくという成果がきちんと出ているわけです。そういった意味で、私は、単なる知識伝達型の教育ではなく、探求的な学び、そのためには、ESDとなると、資料3の(3)の国立教育政策研究所にあるような構成概念とか、それから、つきたい能力というところが非常に大事になって、クリティカルに物事を考えるということも、これは、一人で考えているときも、頭の中で問うということ。でも、集団の中で行動を考えると、客観的事実に基づいてきちんと議論できるという能力だろうと思います。そして、どういう未来を想定するのかということも、これは一人で考えてもだめですね。ですから、いろんな価値観がある中で、協力して同じくする。価値が違う中でどういうふうに談議を重ねて、そして、社会のビジョンを共有しながら進めていくかということがあるかだと思います。そして、他者と協力する態度。これは、ある意味で、グローバルな問題は一人だけでは不可能なわけです。稀少データを出す組織もあれば、そこに対して、家庭の中でエネルギーを無駄に使うなどと言っても、断熱材の入っていない家であれば、無駄なエネルギーを垂れ流ししているような使い方になるわけですから、政策的にどういうふうに断熱を含めた家をつくっていくかとか、そういうそれぞれの立場によって、どういうところに所属しているかによっても考えていかなければいけないだろうと。

例えば、今、そういうことで、異常気象のことでちょっと建築系で議論しているのは、エコハウスにしろさいと言ってもだめなので、これは最終的には健康問題です。自分の問題として考える。断熱が入っていないと寒いし、外の影響も受けますね。健康に影響する。健康に影響するということは、保険のお金とか、そういうものも使うという、そういう論理的な枠組みをきちんと一般の人にも提示しないといけないのではないかという。そこまで考えるというのは、ある意味で専門的な人の役割でもあるし、初歩の学びの人はそういったところに気づいていくということも大事だということで、先ほど、初歩的学びとか基礎的など。それは小学校ではないと思うんですね。小学生だから初歩的な学びではなく、小学生でも学べる場所はあるわけです。そういったところをどういうふうに指導者も。それから、子どもたちから先生たちも学ぶ場合があるわけです。そういったところを、これを見ていると、ここに書いてあることは理屈があるところで、そこにどうやっていくかということで、私も小まめに電気を消しましょうという世界ではないという立場なので、ぜひそのところをきちんと書いてほしいという立場です。願っているものです。

○北川座長 ありがとうございます。

では、関委員。



○関委員 昨日、今日とたまたま、私は責任投資の国際会議というものがあって、これは日本で初めて開催されて、東証ホールで2日間やっていたのですが、それに出てきまして、今、投資の世界でも、要するにESD投資というか、環境社会ガバナンスを投資判断にどう組み入れるのかということが、特に欧米、特にヨーロッパを中心に非常に盛んになってきているんですね。いろんな人がいろんな話をしていましたけど、要するに、長期的に考えたときにどういいう投資判断をすべきかということ考えたならば、社会をよくするように社会貢献的に投資するというのではなくて、ちゃんと長期的にどういう判断が一番合理的なのかを考えたときに、環境とか社会の問題とか、あるいは、最近だと、お話に出ていたように、自然災害に関するリスクだとか、いろんな要素を投資判断の中に入れていまいと。つまり、投資判断の中で不可分な要素として、環境とか社会とかリスクとか、そういったものを入れていくようにだんだんなっているということなんですね。これは、企業の行動もそうですし、昔風に言うと、環境問題というのは社会貢献的に取り組むということが多かったと思うんですけど、昨今は、これは日本の企業も海外の企業もそうですが、むしろ、本業を通じていかに、本業の中にサステナビリティ（持続可能性）を取り込んでいく、一体化していく、統合していくということですね。これをやるようになってきていて、そういう意味では、要するに、環境と経済、社会を本当に一体化していこうという動きが、企業の世界でも投資の世界でもだんだんと、まだですけども、主流化に近づいてきているという状況だと思うんですね。

ただ、これをもっと進めていくためには、私は根本に教育がなければいけないと思いますし、そういう行動が本当に広がるためには共通の理解が必要ですし、理解だけではなくて、恐らくもうちょっとエモーショナルな共感みたいなものがないと、知識として理解しているというのではなくて、行動しなければいけないという、そういう共感がベースになければいけないと思うんですね。そのベースをどうつくっていくのかということが、結局世の中を変えていく力になるのではないかと、こんなふうに思います。

○北川座長 ありがとうございます。

では、棚橋委員。

○棚橋委員 小学校の授業で学ぶことは基礎的なことは確かに多いのですが、学習指導要領で示されている学ぶべきことというのは、最低基準、その上は学校で頑張ってくれという投げかけになっているわけですね。教科の学力というのは確かに重要ですし、これがなくては何もできませんので、それはそれでしっかりやるわけですが、それ以外のところのものというのは何かという話になると思うんですよ。それをいろんな国で、日本も含めて、

日本では思考力とか判断力とか表現力という言葉を使っていますけれども、そういった力が将来にわたって必要なものになるだろうと、そういうことになっているわけなんです、なぜそういうことに話になっているかということを見ると、ESDの議論とすごく近いと思うんですよ。つまり、非常にいろんなことがこの後起こるであろう。混迷する世の中になっていくだろうというのは、多分、グローバリゼーションのこととか高度情報化のこととかということもありますけれども、環境問題はどうかということがすごく大きな問題としてあると思うんですね。ですから、持続可能な社会づくりというテーマで話し合っているこの場ありますけど、一般の方々の気持ちとしては、持続不可能な世の中が来ちゃうのではないかという。つまり、環境問題をとりあえず何とかしていくということも大きな問題として必要ではないかと。それを実際にやっていくのは大人であり社会であるわけですけども、その社会の担い手になっている子どもたちにどういう力があつたらそういう力になっていくのだろうかというときには、教科の学力ではなくて、プラスアルファのところになっていくと思うんですね。それをつけるのは、さっき小川委員がおっしゃっていた総合的な学習の時間になる。いろんな問題がある中でそれを解決していくということを一まとめにすれば問題解決力という、そういう言い方になっていくと思うんですね。かつて、いい話だなと思って、よく学校でも話をする事の中に、まだ日産の社長さんだった時代のカルロス・ゴーンさんが、社員教育をたくさんされているのはなぜですかということ聞かれて、問題解決力のない社員は要らないんだと。何か事があつたときに、それをみんなで工夫して解決していくということが本当に大事なんだと。それをつけるために社員教育を徹底的にやっているんだということをおっしゃっていたんですね。それは、世の中が変化したり混迷していく中でも同じように言えるだろうと。問題解決をしていく力というものがどうしても必要です。それは、長い時間をかけた訓練が必要なわけですね。ですから、小学校の間から総合的な学習の時間を使って問題解決的に、さっき小澤委員は探求的とおっしゃいましたが、同じようなことですが、そういう授業をやっていく。その中で、子どもたちが自分で発想して課題をつかんで、自分たちで計画を立てて取り組んでみて、よかったか悪かったかを検証する。その結果から、次はこうしていこうというような、そういう学びを必要としているのだと。それはまさにESDということだと思うんですよ。ですから、そういうことについての日本全体での価値観、価値意識といったものをしっかり持つ必要があるし、そのためには、総合的な学習の時間はしっかり取り組んでいるかどうかということ、ちゃんと検証する必要があるかなと思います。ただ、それは多分環境省のお仕事ではないかなというふうには思いますけれど。小学校で言

えば、英語の授業が増えていくという中で、まさか総合的な学習の時間を減らしたりしないでしょうねということは、本当に心配をしています。

○北川座長 ありがとうございます。

小川委員。

○小川委員 西宮で、今年で2年間ですけれども、保育所と幼稚園の先生たちでESDの研究会をやりまして、今年度中に、西宮市の環境学習都市推進課から、乳幼児のためのESDというサポートガイドを出します。最終原稿がほぼできましたので。ただ、それこそ、先ほどおっしゃられた、ESDという言葉は初めて聞く保育士さん、幼稚園の先生たち約8人で、2年間ずっといろんな話をしてきたのですけれども。その中で、ついついESDというのは、小学校、場合によっては幼稚園ぐらい等であるのですが、やってみて気づいたのは、ゼロ歳からESDということを考えないといけないだろうと。本当に赤ちゃんがおぎゃあと生まれた瞬間から行われるコミュニケーションということも含めて、そういった乳幼児期からの保育の内容は、保育所保育指針の中に書かれているのですが、その内容は、本当に僕はESDを根幹で考える上ですごく役に立つものだというふうには思っています。できれば、ESDをこれから議論していくときに、先ほどから出ている教育としてのシステムということもありますけど、一人ひとりが自立的に生きていくことができる環境を大人がどうつくり、また、本人の力をどう伸ばしていくのかということ、保育所レベルからしっかりとやらないといけませんし、今は待機児童の問題とかがありますけど、保育所に子どもを預けないお母さんたちは圧倒的に多いわけですが、家庭で子育てをしている人たちへのアプローチは本当に必要になってきていると思うんですね、子どもたちの社会性とかいろんなことを考えていく上でも。今まで、視点が、どうしても教育という考え方があったために、ゼロ歳とか、ゼロ歳を抱える親というところのアプローチをしっかりとやらないと、きっと、小学校、中学校というところからの議論をしていると、難しいのかなというふうなことをすごく感じています。ですから、できれば、ESDを今後進めていくにあたって、トータルな人生、一人の人間が生まれてから死ぬまでをどうやって射程に入れるべきかということです。

あと、教育の議論をして、当然ESDですから、教育なんですけれども、実際問題、ESDという切り口の中で、まちづくり的な方向性とか、新しい社会に向けた共通の価値をどうつくっていくのか。いろんな議論を含めて、ESDという中で、それぞれが語っていることというのは結構あるように思うんですね。今回、ESDということ、実際に教育レベルを中心に落としていくとしても、ESDが、一つには、いろんな主体を巻き込んだ制度、社会をつくっていく方向

性も提示するし、先ほど言ったような、新しい時代に向けた価値をみんなで議論していくという価値創造のタイミングに入ってきているというようなこととか、そういったこと全体を制度設計した上で、根っこのところのESDという教育の部分をどんなふうに体系化していくのか。そのグランドデザインがすごく今は必要だと思っています。そうでないと、ある人がESD、この人もESDと言っちゃうと、本当のESDとは何かはわからなくなってしまって、そういうところは、一旦、今回、整理するところまでを、この10年をかけてようやく現実が見えてきたというところで、僕ははっきりと提案したほうがいいのかなというふうに思っています。

○北川座長 ありがとうございます。

資料4についてご意見をいただいております。途中で資料3についてのご意見もあったようですので、資料3についても大切な議題でもありますので、次の機会に、今日の議論を踏まえてご議論をいただければと思っております。

それでは、先ほど議論をした資料4の検討事項にあります広報について、環境省より説明をさせていただき、また、文部科学省のほうからもご説明をいただきますので、よろしく願います。

○吉田環境教育推進室長 ご説明いたします。資料5でございます。環境省のESDに関する広報についてということで、通年の取組ということで、順番に公表資料等をつけていますが、裏をご覧くださいますと、これから11月の世界会議に向けて、愛知、名古屋、岡山、それから、東京都で実施予定の事業を書かせていただいております。それで、最近、環境省のほうで取り組んだことについて、次の資料でございますが、2月10日にユネスコ世界会議に向けた広報についてということでお知らせをしております。環境省と文部科学省であわせてのキャラクターをつくって、また、1枚開いた右側のほうにございますけども、環境省、文部科学省の連名でのこういったロゴ。それから、いろいろな印刷物をつくって配布するというようなことをしております。

もう1枚めぐりまして、参考資料①というところがございますが、こういったポスター。それから、これは毎日新聞で、1面広告で出したものでございます。

それから、参考資料②でございますが、後ほど文部科学省さんからご説明があると思いますが、愛称の公募を文部科学省と環境省が合同でやっております。

また、参考資料③としては、+ESDプロジェクトということで、これは、インターネットでこういったいろいろな情報、それから、横の連携等がとれるようなものを進めているということでございます。

また、参考資料④として、環境省でこの春から、4月と6月に開催予定の東京でのイベントにESDのブースなりを出展したいというようなことを考えております。

そういったことですが、あと、環境省といたしましては、本番のサイドイベントの実施とか、それから、プレイベントといったようなものも実施したいというふうに思っております。

また、8月ですが、東京でESD地球市民村の事業ということで、3日間にわたりますて、民間を中心にした活動でございますけれども、国連大学を使ってのイベントというものもあると聞いております。

また、その他、愛知・名古屋、岡山市でのイベントというものも、後ほどご説明があるかと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

○北川座長 では、文部科学省のほうからも。

○文部科学省 文部科学省でございます。お手元の資料7をご覧ください。1枚おめくりいただきまして、参考資料①を用いてご説明をさせていただきたいと思えます。

ユネスコ世界会議が11月でございますけれども、ESDの取組自体はこれで終わりではございませんが、せっかく日本でこれだけ大きな会議を開催しますので、これを機に、ぜひESDの認知度も向上させたいというふうに考えております。

1点目の愛称公募につきましては、参考資料③-2をご覧ください。こちらにつきましては、ESDはそもそも、もともと英語であるということ、それから、持続可能な開発のための教育ということも略したものであるということ、なかなか多くの方々にはなじみにくいものになっているのではないかと。自分たちにも関係があるのだということをもっと理解してもらいやすいような、わかりやすい、親しみやすい愛称をつけることが必要なのではないかということで、3月4日より公募を開始いたしております。前回の会議のときに配付させていただきましたが、こちらのESD QUESTという、ESDとはこういうものだという子ども向けのストーリーブックがあるんですけども、基本的にはそれをお読みいただいた上で愛称を募集したいというふうに考えております。一応、4月末で応募の締め切りと考えておりまして、5月末には決定したいというふうに思っております。決定後は、いろんな広報の場面でもこの愛称を用いていければというふうに考えております。応募総数がどれだけの方に興味を持っていただいたかというメルクマールにもなるかというふうに思っておりますので、皆様方もいろんな場面で、もし機会がございましたら宣伝していただければというふうに考えております。

それから、参考資料①にお戻りいただきまして、2番目はロゴマークでございます。こちら

は、ユネスコと日本政府とで、世界会議の公式なものとして設けたものでございまして、いろんな場面で使用していきたいと思っております。

それから、ESDスローガンでございますけれども、こちらも、ESDをより身近に、自分と関係あるものということを理解してもらうためにつくったものでございまして、ポスターなどで使用しております。

それから、2ページ目に行きまして、ESD QUESTについては先ほど申し上げたとおりでございます。

それから、ESDの世界会議のためのフェイスブックというものをつくっております。こちらでは、ユネスコスクールでの実際のESDの実践事例を紹介したりですとか、身近で何ができるかといったようなことを示すESDの標語、それから、ESDに関する書籍の紹介などをしておりますので、機会がありましたら、ぜひご覧いただければと思います。

7番目は、先ほどご紹介がありましたが、先ほどの愛称公募もそうですけれども、環境省さんともいろんな場面で連携しながら、今後も広報を進めていければというふうに思っております。

それから、こちらには記載がないのですが、オフィシャルサポーターということで、今年度、6名の方にいろんな場面での広報にご協力をいただいております。さかなクン委員にも本当にいろんな行事にご出席いただきまして、特に、子どもとか保護者を中心に、ESDについて普及にご協力いただいております。

来年度につきましては、一般の方、もう少し広い層に参加をいただけるようなイベントも考えていきたいと思っております。まだちょっと、具体的な企画についてはこの場でお話しできる状況ではないのですが、より広い、教育関係者に限らず、より広く、いろんな方々に参加していただけるようなイベントを考えていければというふうに考えております。

以上でございます。

○北川座長 ありがとうございます。

ただいま、広報につきまして、両者のほうから説明をさせていただきました。

委員の皆さんでご意見等がありますでしょうか。

では、さかなクン委員のほうから。

○さかなクン委員 さかなクンです。

まずは、北川副大臣様と、2月22日にESDの発表会をご一緒させていただきました。どうもありがとうございます。この発表会のときに、たくさんのお子様、そして、企業の皆様が取

り組んでいらっしゃるESDの発表を一つ一つ聞かせていただきました。そのトップバッターで発表された方は、北海道で取り組んでいらっしゃる企業の皆様と、そして、小さな男の子と女の子でした。その小さな男の子と女の子はかわいらしい、本当に小さな子だったんですけど、ふだん、山で木を切っているということをまず発表されたんですね。男の子のほうは、僕は木を切るのが大好きですと元気よく発表されるのです。木を切るのはとても楽しいですと。木を切ると、実は、間伐材を切ることによって森を豊かにすることにつながるということを、わかりやすく磁石で張っていってくれるんですね。こうするとこうなると。それで、木を切って何があるかという、温泉の無料券がつくと。これをもらえるんですと発表するんですね。だから、大人の皆様が無料券をつくっていらっしゃるから、僕たちは木を切ってお手伝いすると、これがもらえるんですと男の子が発表するんですね。女の子は、こうするとさらにこんないいことがあるんですと、かけ合いで発表するんですね。それがすごく楽しくて、わくわくして、まるで欽ちゃんの仮装大賞を見ているような、そんな感じなんですね。ESDというのは、何をするとどうなるのかという、それが、なるほど、こうやって教えてくれるとすごくわかりやすいと思いました。その男の子と女の子は、何が言いたいかという、ESDの発表会で優秀な発表をされると環境大臣賞をいただけるという、それも大きな目標にされていたと思います。発表のときに、すごく明るく笑顔で大きな声で発表されるので、次はどんなふう展開が進んでいくのだろうか、みんながわくわく、身を乗り出して聞きたくなるような発表なんですね。結局は、木を切って、僕はこう思いましたと。何だろうと思ったら、その木を運ぶのはトラックです。トラックが運ぶと排気ガスが出ます。これをどうすればいいかを僕は考えましたと。そうしたら、ここには馬がいると。お馬さんに運んでもらえば排気ガスは出ない。そして、その分の浮いたお金でお馬さんに餌をあげればよいと。ガソリン代がお馬さんの餌になると。かわいいと思ったんです。すごいなと。こういう発表は、テレビとかラジオとかでも発表していたらもっといいのにと思ったんですね。企業の皆様の取組と地域のお子様が一緒になってされているその発表というものがすごく楽しくて、一つ一つ聞かせていただいたのですが、中には、企業の大人の方がずっと長くしゃべっていらっしゃる発表もありました。正直、あまりおもしろくなかったです。やっぱり、お子様がすごく元気にこうなんだと発表されているのは、もっと聞きたいというふうに思うんですね。そういうふうに思いました。

ESDというのはすごく難しいような気がするんですけど、何をどう取り組むと、結果どうなるのだろうかということをごくわかりやすく表現していただくと、あっ、そういうことな

んだ。じゃあ、自分もこうしてみたいというふうに、多様なESDにつながっていくのではないかと思います。

そこで、原点に帰ったときに、私は今、頭に魚の帽子をかぶって、白衣を来て、一風変わった感じで参加させていただいているんですけど、実は、この頭にハコフグを乗っけて、実は今年で十魚年、いや、15年目になります。そう考えますと、これもESDだと思うんですね。すごくわかりやすく、すぐ気づいていただける。ゆるキャラとかキャラクターがあると、特に、小さなお子様もみんな、見たいとか、一緒に写真を撮りたいとか、どんな動きをするのだろうかと、わくわくすると思うんですね。数あるゆるキャラの中でも、今、すごくはやっているふなっしーは、声とかしゃべり方がさかなクン、似ているねとよく言われるんですけど、ゆるキャラの中でもすごく異色を放っていて、しゃべる、飛ぶ、不思議な動きをする、次はどんなことをするのだろうかと、わくわく、見たいというふうに思うんですね。だから、みんなが見てみたいとか、自分もこういう表現してみたいなというふうに思えるESDがどんどん広がると、もっともっと楽しいなと、まさにESDになっていくのではないかなと、自分はそう思います。

ありがとうございました。

○北川座長 ありがとうございます。

まさしくその広報のほうを担っていただいておりますので、よろしく願いいたします。

それで、先日、私も一緒に出させていただいて、北海道の子どもたちの発表、あれしか見なかったのですが、あの方々が大賞をとられたようでして、プレゼンテーションは、実は、川嶋先生が編み出されたKP法らしいのですが、私も思わず引き込まれまして、たまたまご一緒になれたので、子どもたちがああい紙を張りながら、引き込まれていくという、ああい広報の仕方というものは学ばなければいけないなという感じがしたものです。今後は、先ほど小川先生がおっしゃられた手段と目的、今、さかなクン委員に言っていただいたように、結果がわかるという、そこではないかなと思うんですね。そういう点について、広報の中で今後とも考えていければなと思っていますので、よろしく願いいたします。

時間の関係がありますので、今日は地方からもお越しいただいております、広報についてはまた次回にご意見をいただくとしまして、今日は愛知県及び岡山市のほうからもお越しいただいております。

まず、愛知県の方からESDについてのご意見等をいただきますので、よろしく願いいたします。



○愛知県環境部ESD会議推進監 愛知県環境部の吉田でございます。本日は、私どもの取組を説明する機会をいただきまして、誠にありがとうございます。愛知県からは、本日、2名参加させていただいておりますので、説明のほうも分担をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

お手元に赤い冊子がございます。1回開いていただきますと、中にA4の1枚ペラの紙がございますが、それにつきましては後ほどご説明させていただきます。

1回開いていただきましたところの右側でございますけれども、あいち・なごやからのメッセージという記載がございます。その中ほどからやや下のところでございますけれども、愛知・名古屋では、2005年に自然の英知をテーマといたしました愛知万博、それから、2010年にCOP10を開催いたしまして、県民の中に持続可能な社会の大切さに対する意識が高まっております。今回、11月の世界会議によりまして、そうした地域の意識をさらに高めて、持続可能な社会づくりに貢献していきたいというふうに考えているところでございます。

私どもの準備状況でございますけれども、一昨年5月に、地元として世界会議を支援するために、支援実行委員会を設立いたしました。会長は愛知県知事、それから、会長代行に名古屋市長、それから、副会長として、地元経済界のトップの方にもご就任をいただいているところでございます。

この赤いパンフレットを全部開いていただきますと、真ん中のところに、あいち・なごやの役割という記載がございます。左上の四角のところから、1番、会議支援、それから、下へ参りまして、あいち・なごやの魅力発信、それから、右側へ参りまして、3、ESDの普及啓発、それから、4、ESDの取組促進、この四つを取組の柱として、開催に向けた準備を進めているところでございます。

それでは、恐縮でございますけれども、A4の1枚ペラの紙のほうをご覧いただきたいというふうに存じます。

四つの柱のうちの普及啓発でございますけれども、愛知県では今年をESDイヤーというふうに位置づけておりまして、さまざまな取組を展開することといたしております。本年1月13日にはESDイヤーのキックオフイベントを開催いたしまして、来賓として、世耕内閣官房副長官、それから、環境省の清水局長様にもご出席をいただき、キックオフ宣言を行うとともに、トークショーやパネルディスカッション、それから、ワークショップを実施いたしまして、700名を超える方にご参加をいただきました。ESDを理解していただくとともに、開催機運の盛り上げを図ることができたのではないかと考えておるところでございます。

これまでも、2年前イベント、あるいは、1年前イベントというような節目のイベントを初めとしてさまざまな啓発活動を行ってまいりましたけれども、ESDの認知度というものは依然高まっているとは言えない状況だと認識をいたしております。今後も、春に半年前イベントを開催するとともに、PR隊の編成などによりまして、県内各地でのPR活動を行いまして、世界会議の機運の盛り上げを行っていきたいと考えているところでございます。

それから、次に、ESDの取組促進でございますけれども、多様な主体の取組が重要と考えておりますが、愛知県内では、さまざまな主体による取組が、徐々にではございますけれども、活発化してきております。例えば、愛知学長懇話会が大学生のリレーシンポジウムを1月からスタートさせておられます。また、県内の主要企業で構成されております環境パートナーシップ・CLUB、EPOCと申しますけれども、さまざまな環境をテーマとしたセミナーなどを開催していただいているところでございます。こうした取組を私どもの実行委員会のホームページで紹介し、県内各地に広げるため、パートナーシップ事業という制度を設けまして、登録をしてもらっているところでございます。このパートナーシップ事業は、愛知万博やCOP10の際にも実施いたしましたもので、多様な主体によるESDの取組を促進するとともに、PRにも協力してもらおうということで、盛り上げを図っております。

それから、次に、併催イベントでございますけれども、こうしたさまざまな団体の情報発信の場として考えているものでございまして、これは、世界会議の開催にあわせて、さまざまな分野で取組を行っておられるさまざまな主体が集いまして、発信し、交流をする場となるものでございます。世界会議の会場に隣接いたします白鳥公園、それと、名古屋の中心にあります栄地区の2カ所において開催する予定といたしております。

それから、また、県内全域でESDの取組を促進することが重要というふうに考えておりまして、そのため、今年度でございますけれども、地域づくりの中心を担う市町村の職員向けのセミナーを実施したところでございます。7月から12月にかけて、全体セミナーと5回の分科会、それから、2回の現地視察会を実施いたしまして、延べ590人の方にご参加をいただきました。現在、その内容と、それから、市町村における取組をまとめました事例集を作成しているところでございまして、来年度につきましてもシンポジウムを開催していきたいというふうに考えているところでございます。

それから、次に、次世代を担う子どもたちを対象にした取組といたしまして、子ども会議を開催する予定といたしております。これは、主に、愛知県内の子どもたちが主体となりまして、持続可能な社会づくりについて現地学習をし、話し合いを行い、その成果を発表する

取組でございます。今年度は、その一環といたしまして、子どもフォーラムというものを開催いたしております。

また、ユネスコスクールでございますけれども、現在、愛知県のユネスコスクールは57校になっております。さらに、申請中の学校が44校あり、さらに増える状況でございます。こうした取組をさらに促進するとともに、ユネスコスクールの活動をモデルとして、ESDをユネスコスクール以外にも広げていく取組もしていきたいと考えております。

これらの取組を通じまして、世界会議の開催機運の盛り上げとESDの取組促進を図りまして、世界会議の成功につなげていきたいというふうに考えているところでございます。

○愛知県環境部環境活動推進課長 愛知県の酒井でございます。私からは、ESD世界会議開催後の持続可能な社会づくりに向けた環境活動とか学習に係る点につきましてご説明いたします。時間の関係もありますので、手短にやらさせていただきます。

環境学習等行動計画概要版という青いものをご覧ください。これは、平成25年2月、全国の都道府県に先立ちまして、私どもがこの行動計画を策定いたしました。

その中に挟みました、白いコピーの紙をご覧ください。あいちエコアクション推進事業と書かれたものでございます。万博、COP10、愛知県の県民の方々は、こういったものを踏まえて、環境意識が非常に高くなっております。そういったことと、今回、ESDの世界会議が開かれる機会を生かして、何とか取組を一気に進めたいと考えまして、中ほどに書いてありますあいちエコアクション推進事業。これは、いろいろな取組の中で、あるいは、活動、暮らしの中で、みんなが環境に配慮した生活をするように、社会行動をするようにという意味で取り組む事業でございます。

まず、一番下のほうにありますハードネットワーク、AELネット。これは、環境学習施設が県内に非常にたくさんございます。こういったものをネットワーク化して、一度にいろんな工夫をしながらやっつけよう。環境学習施設の中でも、先ほどお話が出ましたESD化した環境学習を進めようといった学習の取組も行いながら、いろんな方々に環境学習を提供しようということで、今現在、150近い施設にこのネットワークに入っていて、来年度に向けて、一斉に協働の連携を図ったような活動をしていこうというふうに思っております。また、こういう活動を、WEBサイトを使って、こういったAELネットの活動はもちろん、企業さん、NPOさん、実際に環境学習をやっておみえになる方々、こういった方々の情報をさまざまに発信したり意見交換ができる場を設けて、連携を高めたいというふうに思っています。さらに、ESD会議後には、エコアクションをみんなでやっつけようという機運の盛り上げのためのキッ

クオイベントも開催いたしまして、ぜひ、会議開催後も、こういった環境行動、あるいは、環境学習が県民の中に定着していくように進めたいということを考えております。

以上でございます。

○北川座長 ありがとうございます。

質問等につきましては、岡山市さんの意見をお聞きしてから、まとめてお願いいたします。

では、岡山市さん、よろしく願いいたします。

○岡山市ESD世界会議推進局審議監 失礼いたします。早速ですけども、時間の関係で、始めさせていただきます。

お手元の資料、岡山市資料というものをお配りさせていただいております。

1ページには、この秋に岡山大で開催される会議の一覧が出ております。これらについて運営の一部を担うことになっておりますので、準備を進めております。

2ページをご覧ください。こちらは、全ての会議を支える側の事業になります。会議の支援、あるいは、あわせて、岡山の魅力を発信させていただくこと、こういったことに向けて、今、準備をしております。予算も決まりましたので、それに基づいて4月から具体的な準備に入るということになります。あわせて、PRも継続してやります。今後につきましては、節目となる半年前、6月、あるいは、3カ月前、8月、こういった節目に少し大きなイベントでPRをやりまして、機運醸成を図ってまいりたいというふうに思っております。

続きまして、今日の議題であります、これからの岡山市のESDの取組になります。岡山市は、愛知県さんと同様、世界会議の成功はもちろん開催地として取り組まないといけないと思っておりますけれども、市を挙げて2015年以降もESDを進めていきたいというふうに思っております。そういったことを、今、方針として抱えております。

大きな違いとしまして、来年度に向けて掲げておりますところは3ページになります。平成25年度まで、まず、左の枠をご覧くださいと思いますけども、会議の準備と地域のESD活動の強化、市民理解の向上。具体的に言いますと、ESDの推進に関しましては、学校教育、社会教育、岡山の特徴は公民館があります。こういったところでのESDの浸透というものをここ何年かでやってまいりました。公民館では全部の公民館で、ESDを活動の大きな柱ということで研修を重ねておりますし、先生方も研修を積み重ねてきました。加えて、来年度からは、岡山市は基礎自治体ということで、地域はいろんなネットワークを持っております。そういったコミュニティレベルでの諸活動の中でのESDを推進していくことを進めていきたいと思っております。持続可能な社会づくり活動は、岡山市のいろんな都市整備、あるいは、保健

福祉、いろんなどころでやっております。そういったところの中でも、ESDの理念に合致するものはたくさんあると思います。そういったものをESD事業として捉え直す。広く市民の目に触れていただくことを通じて、地域全体にESDを浸透させていく。持続可能な社会づくりの必要性を理解していただく。こういったことに取り組んでいきたいというふうに思っております。

ご覧のように、平成26年度は25年度と違いまして、大きな違いとしましては、四角の3番目です。事業名として、ESD見える化事業という、ちょっとわかりにくいと、市の中でもいろいろと評判が悪いんですけども、環境保全、国際理解、防災、地域活性化・まちづくり、健康福祉、社会的公正、そういった分野の中での各局の中でESDに取り組んでもらおうということになっております。平成25年度につきましては、ESD関連事業は15でした。4局が対象でした。来年、現段階で44事業、15局にまたがるESD事業をやっていくということになっております。

次をご覧ください。4ページです。こちらは、市の新総合計画の実施計画を抜粋したものです。ご覧のような事業規模で展開するということになっております。4ページのほうにありますけども、まず、一番上の丸は、世界会議の成功に向けた準備ということになります。そこに書いてあるような、会議自体に関わるもの、あるいは、岡山の魅力を発信するもの。ESDをPRするものになります。

下の②のところは、新しく、地域でいろんな組織、部局が連携してESDに取り組んでいこうと。市民の中にESDを理解していただく。あるいは、市民と一緒に持続可能な社会づくり、ESDに取り組もうということで進めていこうとしているものです。特徴としましては、公民館におけるESD活動の推進とありますし、②の四つ目のポツ、ESD市民活動推進事業というものが新しく加わりました。これは、今までESD活動を進めてきたのですが、なかなか仲間に入ってくださらない方々がおられました。そういった方々に新しく仲間に入っていただくために、重点的に市民活動の中でのESDを推進していこうというようなものを考えております。

5ページにつきましてはイメージですが、今申しましたように、いろいろなつながりを通じて、多様な担い手によるESD活動を推進していったら、その中で新たな学び、交流、気づきをして、持続可能な社会づくりに貢献する人材を育てていこうと。持続可能な社会の担い手をつくっていこうということが今の岡山市の方針でございます。

最後のページ、6ページをご覧ください。最後に、今後の岡山市のESDの推進について、方針をまとめております。岡山市は、ご案内のように、RCE活動、岡山大学認定のESD拠点事業

をやっております。一応、10年の節目となりますけども、引き続き地域のESD推進の一翼を担っていきたいというふうに今は思っております、ESD推進協議会の事務局を引き続き担う用意があるということです。現在、そういったことに基づきまして、地域全体でESDを進めていくための基本構想を策定中です。

下の囲みの中には、岡山市自身の取組方針を書いております。今申しましたように、引き続きESDの地域拠点の事務局を担わせていただけたらと思います。それから、さらに、今までESDに参加して下さっていない市民、あるいは、企業、団体さんに、ESDを一層進めていくための取組を広げていきたいと思っております。

2番目です。いろんな部局、都市整備も保健福祉も、そこでのESDをそれぞれが取り組んでいくということになります。

それから、3番目。岡山市では、ユネスコスクール、あるいは、公民館・CLC国際会議、こういった会議があります。これを契機に、RCEだけではなしに、ユネスコスクール、あるいは、公民館・CLCに関する新たなネットワーク、こういったものに岡山市も参画させていただいて、地域内外で広げていって、それで地域全体のESDを、あるいは、広域のESDの取組の強化を図る一翼を担わせていただきたいというふうに思っております。

あとは、職員の人材育成、こういったことにも取り組んでまいりたいと思っております。

ちょっと時間も参りましたので、この辺りで終わらせていただきます。失礼しました。

○北川座長 ありがとうございます。着々と地元で準備を進めていただいております、改めて、愛知県、岡山市の両自治体の皆さん方にも感謝を申し上げる次第であります。

今、愛知県、そして、岡山市のほうからご意見をいただいたのですが、委員の皆様方で質問等があればお受けをしたいと思っておりますが、私のほうが5時15分から官邸で会議がありますので、中座をさせていただきますけれども、いずれにしても、5時までの予定であります。ご質問等がありましたらいただければと思っておりますので、あとは事務局のほうで進行をさせていただきますたいと思っております。また、次の日程についても、後ほど事務局のほうからお伝えをさせていただきますたいと思っておりますので、勝手に申し上げて申し訳ございませんが、よろしくお願ひ申し上げまして、失礼いたします。ありがとうございました。

○吉田環境教育推進室長 それでは、今、副大臣からお話がありましたが、特にご質問はございますでしょうか。

(なし)

○吉田環境教育推進室長 特になければ、今後のスケジュール等についてご説明をさせてい

ただきたいと思います。

今後のスケジュールということでございますが、資料8をご覧ください。次回は4月中・下旬を予定しておりまして、また日程の調整をさせていただきまして、開催日を決めたいというふうに思っております。

また、本日の会議につきましては、議事録及び資料を環境省のホームページで公開いたします。また、内容につきましては各委員にご確認いただくということとしております。

本日は熱心にご議論いただきまして、ありがとうございました。いろいろ意見をいただきましたが、取りまとめた上で次の懇談会に臨みたいというふうに思っております。

それでは、本日の懇談会はこれで終了させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

午後4時58分 閉会